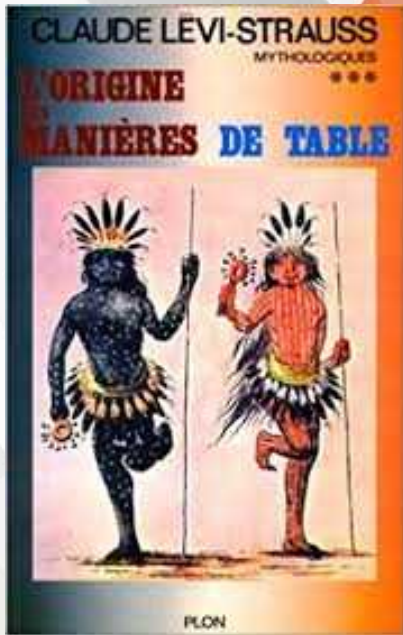


レヴィストロース  
神話学第3巻  
食事作法の起源 4

Arapaho娘は月に嫁入り  
舞台は北米



L'Origine des Manières de Table  
食事作法の起源 1968年7月出版 Plon社

主な内容

- 1 食材（取得、摂取）における文化介入（モンマネキ神話）
- 2 文化継続のために周期性の確立（転がる首神話群）
- 3 近すぎる同盟、遠すぎる同盟（麗しのアサワコ）食事作法が同盟作法の教え

**4 月に嫁入り  
（カエルと娘の食い競争、北米Arapaho族）**

- 5 数え方の起源
- 6 神話北上説

# 月の嫁神話群 北アメリカ

周期性  
日夜の替わり

食事作法の確立

北米  
アラパホ族（今のコロラド州居住）の娘

樹上に輝く姿に魅せられ  
月に嫁入り

食い方作法でカエルに圧勝

日夜、季節の替わり、年の周期



北米大陸Arapaho族の居住地とカナダヤマアラシの生息域（網目）、同族はかつてはよりヤマアラシの域にちかい北方に居住していた。



カナダヤマアラシ。  
挿絵は本書から

# 転がる首神話群のグローバリズム

M391神話（転がる首）等に見る天体の創造と周期律の

## Syntagme (Analytique)

参考スライド  
第3回（前回）  
の資料

Paradigme Dialectique

	天体の創造	日夜の交代	季節の替わり	
<b>罪</b>	M391 狩りすぎ 自然への不敬	M392 兄妹婚	M393 信じやすさ 兵士の失敗	M255 母子婚
<b>罰</b>	虐殺	追放殺害	殺害	殺害され 首になる
<b>抵抗</b>	毀損 首が残る	毀損	毀損	
<b>追放</b>	放逐		放逐	昇天
<b>昇天 周期性</b>	M255と関連	月に変身 女に周期性	月星虹の創造 女に周期性	夏太陽 冬太陽の起源
				M362 1妻多夫の 妻が義務否定  弟を殺害  脚を切る (魚の起源)  上半身オリオンに (漁期の周期性)

SyntagmeとParadigmeが形成  
する枠をGlobalとする

# 月の嫁神話群の宇宙野、グローバリズム

## 月の嫁神話 (M425等) に見る周期律の獲得

### Syntagme (Analytique)

#### 天地創造

#### 日夜の交代

#### 生活の交代

#### 食事 (生活) 作法の確立

不適

昔、昼と夜がないただ暗いだけの地上だった。主の家族は地上に住んでいた。天体は生まれていない。天に移住すると決めた (M426)

人社会は指導者を失いいかに治めるかが欠落した (M426)

改革

天に移住すると決めた (M426)

太陽と月はそれまでの気儘な宇宙周回を改め、周期的に回遊すると決めた (M428)

息子二人。太陽と月。嫁探しに地上に降りる。月は人間の娘を太陽はカエルを嫁に連れ帰る (M426)

実行

娘とカエルの食べ比べ。どちらが心地よい音を立てるか。娘の勝ち (M425)

変化

SyntagmeとParadigmeが形成する枠を宇宙野とする

嫁は地上に戻りArapaho族は文化生活を獲得

姑から什器生活品の用い方を伝授される (M428)

Paradigme Dialectique

M428 星(太陽と月)の妻 (第5) Arapaho族 (176~179頁)

昔は主家族は地上に住んでいた。暗闇だけの地上を抜けて天に移った。

テント生活の主の家族。子は兄弟二人。

二人は狩りにでるも規則を特に設けぬまま、あちこち出沒していた。

(日夜の交代の周期が定まっていないとの暗喩)

ある夜、二人揃って「そろそろ独立したいな、妻をもらおう」このあと地上の娘の評定に進んで太陽がカエル、月は人の娘を候補と選ぶ。その一節：人の娘が私を見るときの目は細く、皺だらけだ。少しも美しくない。それに比べカエルは～

(太陽を見るときに人は目をすぼめる。太陽を見てはならないの伝承も)

月が望むArapaho村落の情景 ;

地上に降り川を西に沿い上流に向かう（今のネブラスカ州、ミズーリ支流のニオブ  
ララ川は西から東に流れる）。程なくして見つけた村

« L'air était embaumé, la vue magnifique. Les oiseaux chantaient ainsi que les reptiles et les insectes. Une eau limpide, reflétait les arbres et le ciel. Les habitants du campement se dépensaient en joue en travaux divers. Lune admirait cette scène idyllique quand il vit 2 jeunes femmes qui suivaient la berge et en ramassant du bois mort. Vite changé en porc-épic, il se fit remarquer de l'une d'elles,

«A-t-on jamais vu plus beau porc-épic ? S'écria, la jeune fille, ces piquants sont longs, blancs, superbes. Il me les faut justement, ma mère en manque » Le porc-épic entraîne la demoiselle vers le sommet d'un grand arbre... »

Quand le porc-épic reprend son apparence humaine et parle, séduite par l'élégance et sa beauté de son prétendant, la jeune fille accepte de le suivre jusqu'au ciel » (page177)

村にながれるそよ風の芳しさ、広がる景色の美しさ。思わず月は見とれた。鳥は歌い、カエルもコオロギも唱和した。月は牧歌的状景に息を呑むも、ある娘に目をとめた。

二人連れの一人、枯れ枝集めに川縁を歩いていた。あまりにも美しい、見つめる間もなく月はヤマアラシに変身した。

娘がヤマアラシを見留めた。あのトゲ毛を見て、白くて長い、ステキ！あのすべてが欲しいわ、母さんに分けてやれる。ヤマアラシは思わせぶりに身をさらし、娘を木の天辺に誘い出した。ヤマアラシを追い木に登り、天に至った。

(手にする棒でヤマアラシを叩こうと振り回す。その度にヒョイと高みに移る。娘のお侠ぶりを現すVarianteも)

高木の頂きに来てしまった。目の上にヤマアラシならぬ若者の輝く姿が出現、驚くも天に上ろうとの誘いに娘はうなずく。

ヤマアラシを狩る娘の動機は「母にトゲ毛を贈ってあげたい」。母親は将来の婿の晴れ着衣装をヤマアラシのトゲ毛で飾る。ゆえに娘はpubère妙齡、婚姻可能を暗示している。



Arapaho族  
婦人とヤマアラシ棘毛の胸飾り  
(左)  
娘と什器 (央)  
カナダヤマアラシ  
(写真はネット採取)



なおこの状景をしてレヴィストロースは悲しき熱帯で用いたBon Sauvage = 良き野蛮 = の表現はありうる、その傍証としている。Ce tableau embelli de la vie indigène montre que l'idée du BON SAUVAGE n'était pas étrangère aux sauvages ! (181頁)

先住民生活の光と風に彩られた「一幅の絵」を見るだけで、良き野蛮« Bon Sauvage » が形容矛盾 (oxymore) であるとの批判 = 13年前 (1955年) 出版の「悲しき熱帯」の章題名 = は見当違いと主張する一文。

「どうだ形容矛盾などと片付けるのは誤り」筆勢いも伺える自信の一文、

直接表現、意趣返し、珍しい言い回しです。

一方、太陽はカエルをつれて戻る；

«Mais où est la femme que s'est choisi mon frère » demanda Lune. « Dehors ! » répondit Soleil avec gêne. Sa femme était une grenouille qui sautillait devant la porte et qui urinait à chaque bon.

(父親はその様をして「Femme-coulante垂れ流し」女と擲揄した)

Surmontant son dégoût, Lune la fit entrer dans la cabane.

でも兄の嫁（候補）はどこに？月が尋ねると、太陽は困った表情で外と答えた。嫁はカエルだった、玄関戸の前でぴよんぴよん跳ねていて、跳ぶたびにおしっこを垂らした。

月は気分を害したがなんとか抑えて屋に入れた。

カエルの目玉は大きく顔は厳つい。赤い肌のでっぷりお腹には短い手足が生えている。月は母に向かって「どちらがお好み？二人に乾燥レバーを与えて、どちらが心地よい噛み音を立てるか」食い比べを申し入れた。

娘とカエルに野牛内蔵を与えた。

*Il donna un morceau de tripe à chaque femme, pour voir laquelle ferait en mangeant le bruit le plus agréable à l'oreille.*

どちらが耳に心地よい食べ方を披露するか「食事作法」比べ。

人の女はポリポリ軽い噛み音でレバーを食む。食べ終わりさっさと水を汲みにでた。カエルは歯茎の間に炭を挟んでコリコリ音立てを仕組んだが、口から黒い唾が垂れ流れるだけだった。月は大笑いした。カエルはもぐもぐするだけ、水瓶を抱え尻込みする。

「お前がこんな具合だから」月に向かって「もう離れてやるものか」一跳びして胸に捉まった。月に染み込むカエルと水瓶は今でも眺められる。

## Arapaho娘が月に嫁入りして学んだ文化

その1人間社会の周期性の起源。

« À cette époque remonte l'organisation de la vie humaine ; les objets d'usage récurrent leur nom et leur fonction, ainsi que les substances alimentaires. Les hommes et les femmes apprirent à connaître leurs besoins et leurs règles de conduite » (177頁)

訳；人間社会の仕組みはこの時期に形成された。食物と共に日常で使用する道具の名前、使い道が定まり。生活を営むための義務、行動の規則を男も女も学び、モノにした。

## その2身体規則性の確認文化

« Venez vite ! cria la femme humaine en haletant. La belle-mère accourut, tata son corps, en fut stupéfaite de découvrir entre ses jambes un bébé bien constitué qui remuait » (178頁)

訳 ; 「すぐに来て」若妻が叫んだ。義母はかけより体をさするとなんと股の間から赤ちゃんが出てきた、これには本人が驚いた。五体満足、おぎゃと泣いて手足を動かした。

Le vieillard (老人、義父、家父長) が出て曰う。 « Tout cela est bel et bon, dit le vieillard, mais je n'aime pas ces accouchements brutaux qui n'ont rien de civilisés. Dix lunaisons doivent s'écouler entre la conception et l'accouchement... » これからすべてが願い通り (beau=bel) で上手くいく。だけど今回の分娩騒動は乱雑だった。少しも文明化していなかったな。

懐妊と分娩の間は月の巡りの10重なりとしっかり心して…

## 老人の小言はなおも続く

「人間の女なら今月はさわりが訪れなかったを知るし、原因にも思い当たる。

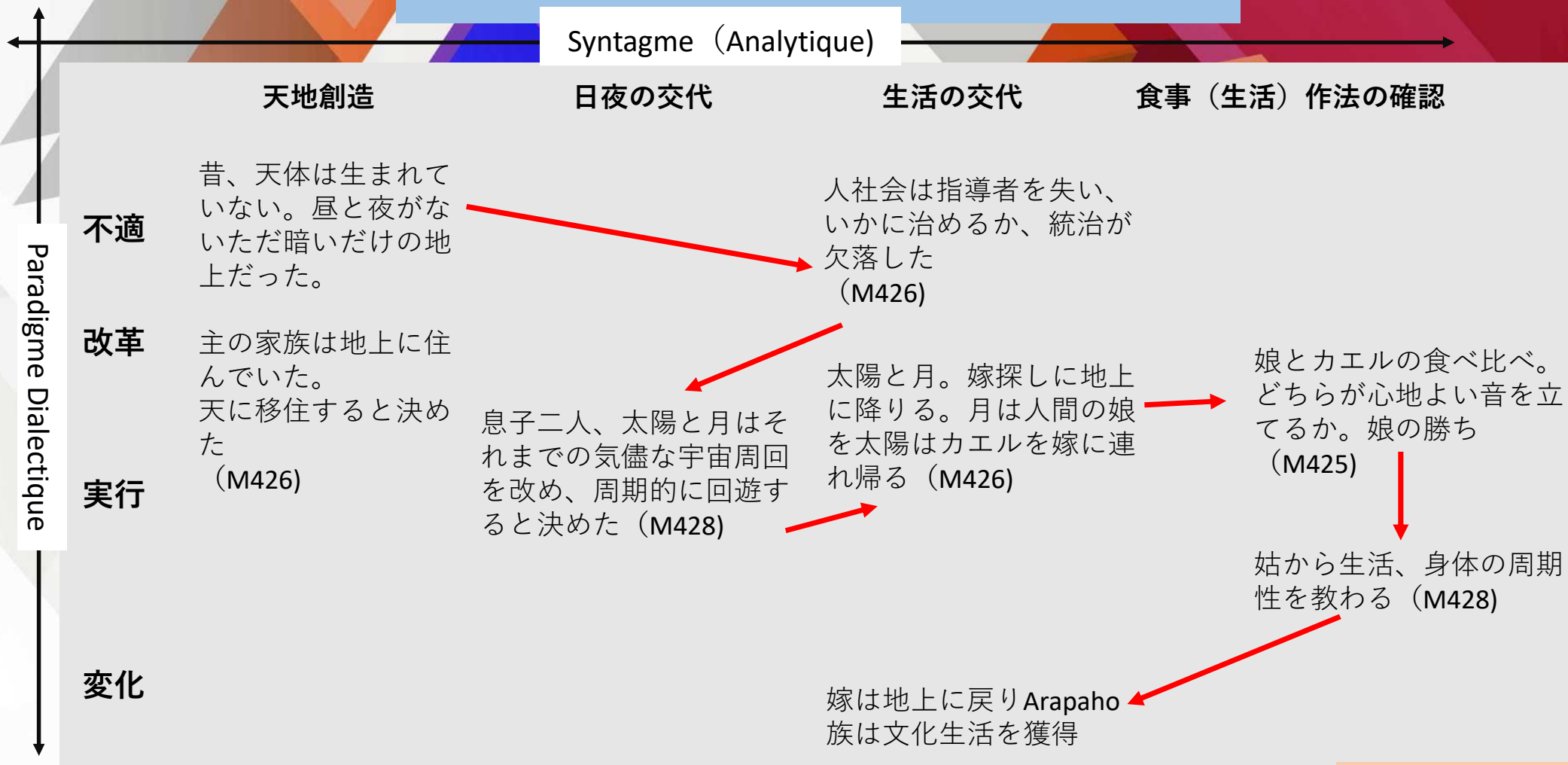
そこいらのブタや猿とは違うのじゃ。その事態になったら十分の余裕を持ち、前もって母と夫に告げるのじゃ。胎児は経血で育つと知れ、女の血が股から流れ落ちず10回が腹に溜まったら子が生まれるのじゃ」 (179頁)

かくして人はカエルや猿、豚との差を誇れるまでになった。カエルや地虫との婚姻同盟にのめり込む粗忽者 (モンマネキ) はもはや出現しないだろう。

# 月の嫁神話群の宇宙野、グローバリズム

## 月の嫁神話 (M425等) に見る周期律の獲得

Syntagme (Analytique)



月の嫁神話 番外 Une variante 部族民通信版の偏倚

月の嫁（元の神話は北米プレーンズ族民の伝承M425）下界に降りた月の神は人間女を選んだ。太陽神（兄）はカエルを伴侶に選んだ。カエルとアラパホ娘のいずれが天の家の嫁にふさわしいか、食べ比べで選ぶ手筈となった。食材はバイソンの乾燥肝臓。娘は一人、テントの下で出番を待つ。そのテントにするりと音も立てずに月は潜り込む。

おののき身構える娘「まだ祝言を挙げていないのに何を始めるの」。怖れ混じりの娘の期待は無意味だった。そんな素振りには少しも見せず月は話しかけた。その中身がなんとも奇妙。

「キミ、噛むときにポリポリ音を立てられるかな」

「あらまそんな話を聞きたかったの。がっかりだわ。抵抗しようと身構えていたのに」

「早とちりしないでくれ、男女作法ではなく食事作法の相談なんだ」

アメリカ先住民の若者とか月とかは礼儀正しいのだ。「音を立てるかですって、アラパホ村では食べる時ポリポリ、ツルツル、ガッツガツは未婚娘の大事な作法よ」

沈黙して食うのは規則違反。噛み音を盛大にが作法なんだそうだ。

「安心した、実はこの天空の食事作法も音立てバンザ〜イみたいなところがアルんだ」

「天も地も同じ作法なら人情も同じね、一安心したわ、月の世界で生きていけそう、でもあなたが守ってくれないと心配だから」「任せてくれ〜」で無事、相談事はまとまった。食べ比べの宇宙選手権への出場の決意を「盛大にパクつくわ」娘は固めた。

太陽神もカエルに同じく天の食事作法を示唆した。

「食べるときにポリ音が好まれるのか」カエルは驚いた。カエル界隈の作法はモグモグ、音立ては御法度なのだから。「なんとヤバンな所なんだ」意気がそがれたカエル。

舅姑の臨席を仰いで娘とカエルの食べ比べが始まった。

「イチバンサ〜ン」カエルは食材を口にすけどクネゴチャと舐めるだけ。ポリ音が一向に出てこない。音立てを仕組もうと口に含んだ炭が真っ黒な汁を垂れ流した。


垂れ流しに舅姑は顔をしかめた。

「ニバン〜サ〜ン」アラパホ娘の番だ。給された乾燥肝臓を手にとって「やるからね〜」。全塊を掴んで大口に任せ一気に入れ、前歯に挟んで奥歯が噛みつく。ポリポリ音は平素の親のしつけの賜物、ポリがポリバリ、バポリボバリに聞こえるほど盛大に噛音を立てまくった「さあ、どお〜」。

舅らの耳にはポリポリバリの豪快さがことさら優しかった。「ユーショウ〜、ニバンサ〜ン、アラパホ娘」無事月の嫁になったとさ。

そばのすすり、塩煎餅の噛み音が耳に快い日本人にはArapahoの大口娘がエイヤ〜、ポリポリ音立ての作法快拳はとっても参考になるのだ。

了（2024年3月）



レヴィストロース  
神話学第3巻  
食事作法の起源 4

Arapaho娘は月に嫁入り  
舞台は北米 了